

入学前後の2回の合宿で 新入生を「中学生にする」

石川県 羽咋市立羽咋中学校

小学6年生の11月に中学1年生と「宿泊体験学習」を行い、更に、中学入学後の4月下旬には2泊3日の「宿泊研修」を行う羽咋市立羽咋中学校。この二つの合宿を柱にし、中学生らしい学習習慣の形成を1年生の導入期に徹底して行っている。

課題

- 小学6年生が中学校生活に対して「見通しのない不安」を抱えていた
- 学級や人間関係の基盤がなかなか出来ず、学ぼうとする姿勢が早期に確立できなかった
- 小学校の単元テストと中学校の定期テストのギャップに、意欲が低下してしまう生徒がいた

実践

- 中学1年生と校区の小学6年生の「宿泊体験学習」を毎年11月に開催。子ども同士のコミュニケーションを深める
- 入学式の翌日に「進級テスト」を実施。その準備のための「進級テスト用学習プリント」を春休みの宿題に課し、中学校の学びへの接続を図る
- 4月下旬に2泊3日の「宿泊研修」を実施。学習方法の指導や学級集団づくりを徹底
- 毎日、宿題以外の家庭学習をする「自習帳」と、生活を記録する「生活記録帳」を使い、学習習慣の定着を継続的にフォロー

成果

- 新入生の中学生活に対する不安が大幅に減り、不登校の生徒が減少した
- 早期に中学生らしい学習習慣が身に付き、クラスの集団意識も高まった
- 「進級テスト」によって、小学校時代に比べて平均点が格段に低くなる中間テストのショックが和らいだ

School Data

◎1947（昭和22）年開校。教育目標は「気力・体力・学力・心力を基底とし、21世紀を担う心身ともに健全でたくましい生徒の育成」。校区にある四つの小学校と連携し、小中のスムーズな接続に取り組む。



校長◎藤田 茂先生

生徒数◎485人 学級数◎16学級（うち特別支援学級2）

所在地◎〒925-0052 石川県羽咋市中央町キ59

TEL◎0767-22-1135

URL◎<http://www.city.hakui.ishikawa.jp/hakui-j/>

中学校**導入期**に**学習習慣**を定着させる

「中学生になるんだ」という
自覚を導入期で持たせる

羽咋市の中心市街地に位置する羽咋中学校は、5年前から校区の小学校との連携に取り組んでいる。中学校の行事紹介や中学校教師による小学校への出前授業から始め、段階的に連携を深めてきた。2009年度に同校に赴任した藤田茂校長は、それらの取り組みのねらいを次のように話す。

「中学校への入学前、子どもの心は期待と不安で満ちています。本校にも、見通しを持ってないことから不安を抱き、過度に緊張して入学してくる生徒がいました。適度な緊張感が必要ですが、ともすると学習スタイルのギャップの大きさに戸惑ってしまったり、最悪の場合、『学校に行きたくない』と思ってしまう可能性があります。これに対して、『中学校とはこういうものだ』という見通しを持たせ、『中学生になるんだ』という自覚を強めることで、中学生らしい学習スタイルにスムーズに適応できるようにしたいと考えました」

小6と中1の合同合宿で
中学校生活に見通しを持たせる

同校は、どのようにして新入生に中学校生活の見通しを持たせているのだろうか。その取り組みを見ていこう。

最も特色ある取り組みは、08年度から毎年11月頃に実施している「小中交流 宿泊体験学習（以下、宿泊体験学習）」である。校区の四つの小学校の6年生と同校の中学1年生が、校区内にある「国立能登青少年交流の家（以下、青少年交流の家）」に1泊2日で一緒に活動するというもの。入学前から子ども同士のコミュニケーションを深め、中1ギャップを軽減するのがねらいだ。

09年度は、小学6年生151人と中学1年生161人の全員が参加。小・中学生混合として1班22〜24人の13班に分けた。

活動内容は、子ども同士で協力し合わなければ達成できないようなレクリエーションが中心だ。与えられた情報を基に宝島の地図を完成させる「なぞの宝島」、一人ずつ見てきた絵を画用紙に再現していく「人間コピー機」などを行った。

こうした活動を通して、小・中学生の縦のつながりと、四つの小学校から集まる小学生同士の横のつながりが生まれる。中学校で置かれる状況を、入学前に体験できるのだ。特に、規模が小さい小学校の子どもにとっては、そのメリットは大きいと言う。

「本校の校区には四つの小学校があります。うち3校は1学年20人程度の小規模校です。つまり、3校の小学生は、班の中でも同じ出身者が1、2人ずつの少数派になります。3校はいずれも郊外に位置するため、純



羽咋市立羽咋中学校校長
藤田 茂
Fujita Shigeru
「笑顔と挨拶があふれる学校をつくりたい」



羽咋市立羽咋中学校
湊口 博
Minatoguchi Hiroshi
教務主任。理科担当。「出来るだけ長く子どもたちと一緒にいる時間を過ごしたい」



羽咋市立羽咋中学校
白山 芳治
Shirayama Yoshiharu
2学年主任。数学科担当。「さまざまな行事や活動を通して、リーダーになる子どもを数多く育てたい」

朴な気質が強く、自分の意見を主張するのがやや苦手の傾向があります。3校の先生方からは「中学校では少数派になるという現実を早い段階で体験できる効果は大きく、中学校に入ってから心細さを感じるのを未然に防げる」との声が寄せられています（藤田校長）

09年度、1学年主任として「宿泊体験学習」を指導した白山芳治先生は、中学1年生が先輩としての自覚を高める効果もあると指摘する。

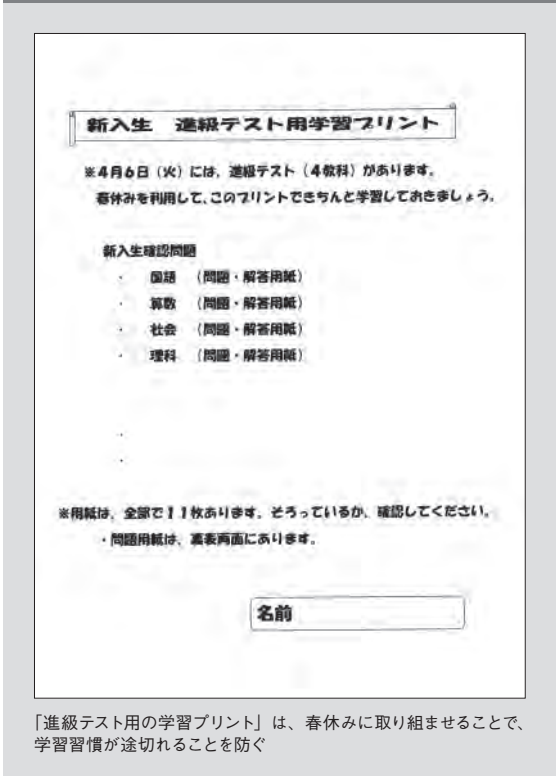
「3校の小学生は他の子どもに溶け込みにくいかと思いましたが、同じ小学校出身の中学1年生が気を遣って声を掛けていました。中学1年生は、前年度、小学6年生の時に参加した経験から、後輩の面倒をみようとするのです。1年目は先輩に教えられ、2年目は

図1 小6から中1導入期の取り組みの流れ

6月	・羽咋郡市唐戸山相撲大会見学—羽咋郡内と同市内の中学校6校による相撲大会を校区の小学生が見学
11月	・小中交流 宿泊体験学習—校区の小学6年生と中学1年生が合同で1泊2日の合宿
12月	・入学説明会—小学6年生と保護者、小学校の学級担任を対象に開催
2月	・先輩と語る会—中2の生徒が母校に出向き、小6の児童の質問に応える
3月	・新入生仮入学—中学生生活をスムーズにスタートできるように、学習の取り組みや部活動を紹介 ・進級テスト用学習プリント—入学後の進級テストの準備として、春休みの課題プリントを配布
4月	・進級テスト—入学式翌日に国語・算数・理科・社会の4教科のテストを実施 ・宿泊研修—2泊3日にわたって、人間関係づくりや学級づくりを進める
5月	・小学校旧担任団による授業参観—小学校の旧担任を招いての授業参観を開いた後、旧担任と生徒の懇談会、旧担任と中1学年団の連絡会もそれぞれ開催

*学校資料を基に編集部で作成

図2 「進級テスト用学習プリント」



「進級テスト用の学習プリント」は、春休みに取り組ませることで、学習習慣が途切れることを防ぐ

逆に先輩として後輩に教える立場になるわけです。生徒は、自分がしてもらってうれしかったこと、相手に喜んでもらえることを意識して行動していました。異なる立場で2年間を通して参加することに意義があると思います」

他にも、中学2年生が母校の小学校を訪れて小学6年生と交流する「先輩と語る会」や授業交流など、小・中学校が交流する機会を設けている(図1)。同校に赴任して8年目の湊口博先生は、新入生の変化を次のように語る。

「以前の新入生は表情がこわばっていました。少しずつ緊張感がなくなっていると思います。中学校への不安は小さくなっています」

ようですが、緊張感が薄れすぎている点の改善が今後の課題です」
徐々にはあるが、不登校の生徒も減ってきているという。

「進級テスト」で中間テストをブレ体験

人間関係の面だけでなく、中学校での学習もいち早く体験させる。入学式の翌日に小学校の総復習的な内容を出題する「進級テスト」を実施すると共に、その準備のための春休みの課題「進級テスト用学習プリント」(図2)に取り組ませるのだ。

同校では、3月中旬に新入生向けの部活動紹介を行う。この時に、国語、算数、理科、

社会の4教科の「進級テスト」を入学後すぐ実施すると伝え、「進級テスト用学習プリント」を配布する。春休み中に各自で取り組み、プリントは入学式当日に提出する。

「進級テスト用学習プリント」は問題用紙と解答用紙が別々であり、「進級テスト」に似たテスト形式にしてある。ただし、テストはプリントから出題されるわけではなく、あくまでも中学校でのテストの形式に慣れさせてもらうためのものと位置付けている。

「進級テスト」は入学式の翌日に実施。制限時間は各教科50分間で、結果は2週間後に生徒に返却する。

「テスト結果によって、生徒個々の学力を早期に把握できるため、授業の難易度を設定

「学力保障」のために、移行期間の今できること

第3回

中学校導入期に学習習慣を定着させる

図3 「宿泊研修」2泊3日の内容	
1日目	8:00 学校に集合
	8:15 出発式
	9:30 青少年交流の家到着
	10:00 入所式
	研修1◎オリエンテーション
	・代表挨拶、施設利用についての説明、諸注意
	10:30 荷物移動
	11:00 研修2◎学年集会
	・体育館に集合し「中学生とはどういうものか」、学年主任の話を聞く。
	11:50 昼食
	13:00 研修3◎学級目標の作成と個人目標づくり
	・生徒一人ひとりが、中学1年生としての目標を立て、その後、クラス全体での1年間の目標を立てる
	17:00 イブニングタイム
	18:00 夕食
18:40 ベッドメイキング	
19:00 研修4◎作文「中学生になって」	
・中学3年間で何がしたいのか、夢や目標を1000字程度の作文に書く	
20:30 寝具、お茶の配布	
21:00 入浴	
21:50 室長会議	
22:30 就寝	
2日目	6:30 起床
	7:00 フレッシュタイム
	7:20 朝食
	8:30 清掃(決められた場所を協力して、丁寧に掃除する)
	9:00 研修5◎レクリエーション説明、校歌練習、対抗戦
	・クラスごとにゲーム等を行う。親睦を図るのが目的。校歌の練習を行い、クラスごとに全クラスの前で歌う
	12:00 昼食
	13:30 研修6◎オリエンテーリング
	・各クラス5～6グループに分かれ、敷地内でオリエンテーリングを行う。教師がチェックポイントに立つ
	17:00 イブニングタイム
	17:30 入浴
	18:30 夕食
	19:30 研修7◎自習帳学習
	・家庭での学習の仕方を指導する。自習帳のよい例を見せながら、家庭学習の意識付けを行う
21:00 就寝準備	
21:30 室長会議	
22:30 就寝	
3日目	6:30 起床
	7:00 フレッシュタイム
	7:20 清掃(決められた場所を協力して、丁寧に掃除する)
	8:00 朝食
	8:40 宿舍点呼
	9:30 研修8◎防犯講座「中学生が陥りやすい犯罪」
	・警察署から講師を派遣してもらい講演
	10:30 お礼の言葉
	10:40 クラス発表会
	12:50 昼食
	13:40 退所式
	14:00 出発
	15:00 帰校式
15:30 終礼(教室でしおりのふり返りを記入)	

しやすくなりました。学力が高ければ、最初から難しい問題を出すという授業の組み立ても可能です」(湊口先生)

また、最初の中間テスト前のステップとして、中学校のテストとはどういうものかを、新入生が体験できるメリットもある。

「小学校のテストでは、多くの子どもが90点以上、時には満点を取ります。ところが、中学校のテストは平均点が60点程度です。小学生の時には高得点だったのに中学生になったらいきなり点数が低くなり、そこにギャップを感じて学習意欲をなくす生徒はかかります。そこで、『進級テスト』は平均点が70～80点になるように作問し、中学校のテストをプレ体験させています」(湊口先生)

10年度は、4教科平均で正答率は77%だった。

「『進級テスト』は、保護者に対しても中学校のテストのスタイルを知ってもらう機会になっています。『進級テスト』がクッション役になって、中間テスト、期末テストで『子どものテストの点数がこんなに下がった』と驚かずに済むようです」(藤田校長)

4月下旬の2度目の合宿で学びに向かう学級集団をつくる

4月下旬には、再び青少年交流の家で、新入生のみ「宿泊研修」を行う。2泊3日の日程で、「研修3 学級目標の作成と個人目標づくり」「研修4 作文『中学生になって』」

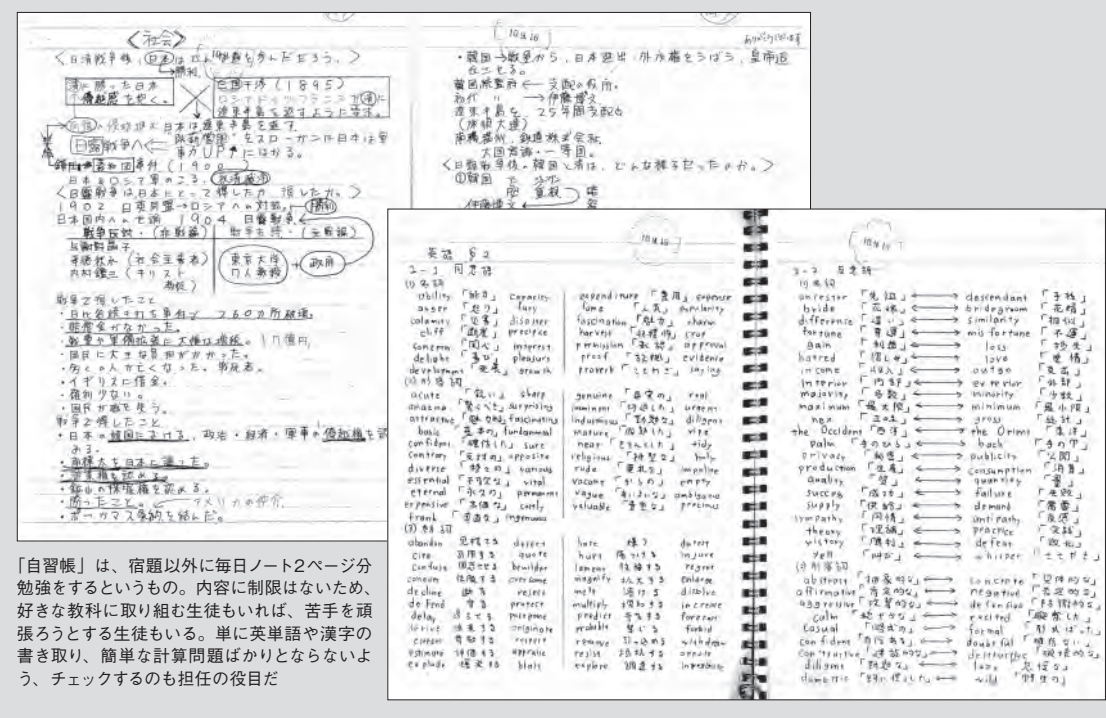
「研修6 オリエンテーリング」などに学級単位・班単位で取り組む(図3)。5分前行動などの規律を徹底的に指導し、クラス目標や個人目標を立てさせ、中学生としての自覚を持たせると共に、生徒同士、生徒と教師の人間関係を育み、学級集団の形成を図る。

藤田校長は、授業時間を割いてでも「宿泊研修」を実施する意義を次のように話す。

「生徒が教師を信頼しなければ、授業は成り立ちません。教師と生徒の関係、生徒同士の関係が構築されて初めて、授業で学んだ内容が身に付くのです。入学当初は緊張していた生徒たちが、1週間、2週間たつにつれ、だんだん素を見せるようになり、4月下旬にもなると互いに慣れてきます。その時期にク

ラスメートと寝食を共にしながら互いをもつと知り、自分たちのクラスをどのような学級にしていきたいのか、学級目標を立てさせる

図4



な自習をしてほしいのかを、担任がアドバイザー研修を利用して、見本を見せ、どのように書いたりしてくる生徒もいます。そこで、

「自習帳」は、宿題以外に毎日ノート2ページ分勉強をするというもの。内容に制限はないため、好きな教科に取り組み生徒もいれば、苦手な教科を頑張ろうとする生徒もいる。単に英単語や漢字の書き取り、簡単な計算問題ばかりとならないよう、チェックするのも担任の役目だ

のです。普段の学校生活では話し合いをするにも1コマ50分という区切りがありますが、合宿ではじっくり話し合うことが出来ます」

「宿泊研修」では、学習習慣の定着に向けて、同校特有の指導も行う。2日目の「自習帳」を使った1時間半の家庭学習指導がそれに当たる。

「自習帳」(図4)は、宿題とは別に毎日家で自習し、担任に提出するという取り組み。入学時にはガイダンスを開き、中学生としての授業の受け方、家庭学習の仕方などと共に、そこで「自習帳」の取り組み方も説明しているが、合宿の場で改めてその意義を確認する。

「最初は、アルファベットの大きく書いたり、2〜3題の計算練習を大きく

スする時間に行っています。本校の調査では、1年生の家庭学習の平均は1時間15分でしたが、1年生で取り組んでほしい家庭学習の時間として、1時間半にしました」(湊口先生)

担任が十分な時間をかけて生徒と触れ合えるため、早期に生徒の個性をつかめる場にもなっていると、藤田校長は説明する。

「研修はもちろん、食事も入浴も班ごとに行います。3日間も一緒にいれば、それまで目立たなかったのに積極的に仕切り出す生徒がいたり、誰もやりたがらずに困った時に『俺がやる!』と手を挙げて責任感の強さをうかがわせる生徒が出てきたりと、生徒のいろいろな面が見られる機会になっています」

「自習帳」と「生活記録帳」で学習のリズムをチェック

こうした導入期の指導でつくり上げたりリズムを崩さないように、その後も継続して指導する。その核になるのが、毎日、担任に提出させる「自習帳」と「生活記録帳」だ。

「チェックの仕方は教師に任されていて、両方にコメントを書いて返却する担任もいますし、私のようにどちらか一方に検印をして返す担任もいます。ただ、毎日必ず目を通すようにしています。生徒が書いてあることを見るだけでも、生徒の様子の変化をつかむ糸口になるからです。生活リズムの崩れの兆候に気付いて、未然に防げたこともありました」

中学校**導入期**に**学習習慣**を定着させる

(湊口先生)

ただでさえ学校が多忙になっている中で、「自習帳」と「生活記録帳」の両方を見るのは負担になる。藤田校長は「生活記録帳を止めてはどうか」と提案したことがあるという。しかし、教師からは「必要です」という答えが返ってきた。

「1クラス40人もいれば、話をしないで1日が終わってしまう生徒がいます。『生活記録帳』があることで、すべての生徒の様子が分かるから必要だと言われました。忙しいことを理由に生徒とのかかわりを少なくしてしまつと、必ずひずみが出てきます。確かに先生方は忙しくなっていますが、生徒と向き合うことから逃げてはいけなと改めて思いました。何を大事にすべきか取捨選択して整理することが、校長の役割として大切なのだと再認識しました」(藤田校長)

湊口先生は「生徒の役に立っている」という実感が最大の動機付けになると語る。

「自分のしていることが生徒の役に立っていると実感できるならば、どれほど忙しくても多忙感はありません。『自習帳』のチェックもそうですが、生徒を知ることが楽しいですし、充実感があります」

行事を精選する学校が多い中で、小中合同の「宿泊体験学習」や2泊3日の「宿泊研修」をあえて取り入れている羽咋中学校。学校裁量の時間に授業を入れたり、時には7時間目

に授業したりとやり繰りして時数を確保している。新学習指導要領への移行に伴い時数確保は更に厳しくなるが、これまで積み重ねてきた導入期指導は今後も続けていく方針だ。

羽咋市教育委員会の支援策

予算や関係機関との調整などを担当

羽咋中学校と校区の小学校との連携は、羽咋市教育委員会(以下、市教委)の「小中交流教育推進事業」の一環として進められている。08年度に始まった「宿泊体験学習」の主催も、市教委と青少年交流の家(独立行政法人国立青少年教育振興機構が運営)である。初年度は、同校とその校区の小学校が実施し、その成果を受けて09年度には市内のもう一つの中学校とその校区の小学校でも始めた。

学校教育課の正津信一課長は、次のように話す。

「我々は、小中の連携を強化して、中1ギャップの解消を図りたいと考えていました。一方、青少年交流の家はコミュニケーション能力を育成する教育プログラムに力を入れて事業の活性化を図ろうとしていました。両者の考えが一致し、事業連携に至ったのです」

「宿泊体験学習」には、大学生ボランティアも参加する。市教委と青少年交流の家は、

小・中学校間と施設、ボランティアの日程調整、ならびに事業推進のための予算支援などを行い、学校の活動を支援している。

小学6年生と中学校の授業規律を統一

市教委は、3年ほど前から小・中学校の授業規律を統一できないかと模索してきた。しかし、設定したルールが詳細すぎたため、徹底しきれなかった。

「10年度は、羽咋中学校の1年生と校区の小学校の6年生の授業で、『聞かれたことは単語ではなく文で答える』『発言者に目を向ける』という決まりごとに絞って統一しました」(正津課長)

「宿泊体験学習」などは、学校単独では資金的にも人的にも実施は難しい。そうした取り組みに対して、市教委が支援し、青少年交流の家等の関係機関との調整役を果たしているからこそ、小中連携のさまざまな取り組みが定着してきたといえる。



羽咋市教育委員会学校教育課学務担当課長
正津信一 Hikizu Shinichi
「先生一人ひとりの元気が出るようにサポートしていきたい」

◎石川県羽咋市
能登半島の付け根に位置する人口約2万4000人の市。日本で唯一、一般の自動車や自転車が波打ち際を走る「千里浜なぎさドライブウェイ」で知られる。市立小学校6校、市立中学校2校を有する。